

▶▶▶ 加藤 裕治

テレビ放送開始70年から

一九五三年二月一日、日本でテレビ放送が始まった。今年はそれから七十年、節目の年にあたる。テレビは戦前から開発が進められ、浜松で研究を行っていた高柳健次郎は、世界をリードする存在であった。しかし戦争によって日本のテレビ開発は中断。戦後、日米のはざまで揺れ動きつつ、テレビ放送はスタートした。

力道山の活躍、アポロ月面着陸、あさま山荘、長嶋引退、湾岸戦争、二〇〇一年アメリカ同時多発テロなどの出来事、また紅白歌合戦をはじめとする歌番組やバラエティー、数多くのアニメやドラマ作品、その全てがテレビから伝えられ、戦後日本の社会や文化に大きな影響を与えてきた。

しかし、「令和三年版情報通信白書」で、インターネット利用時間の全年代平均がテレビ視聴時間を上回ったことが明らかになった。大きな影響を与えたのは十、二十代なのだが、時代の変化が明確になった。

学生にテレビを見る機会を尋ねたところ、祖父母が視聴している番組をのぞき込み、面白かった時という答えが印象に残っている。自分から電源は入れないのだ。これには訳もあって、そもそも学生はテレビ番組表を見る習慣がない。新聞を読まないからである。互いに情報を支え合ってきた戦後のメディア空間が消失しつつある。

さらに視聴者にとってテレビは「見る」「聞く」ものだが、ネット端末であるスマートフォンは「撮る」「話す」「書く」など、人間の多様な行為と関わる。学生たちは映像を「見る」だけでなく、自分で「撮り」「加工し」「シェア」する。各個人それぞれが「ひとりテレビ局」になっている。

だがこの状況は、個人ごとの関心に偏った情報の発信と受容で完結する、閉じた世界に陥る危うさも意味する。ある学生から、大学に入りスマホだけの生活になったら、世間で何が起きているのかわからなくなりましたとの意見もあった。人々の間に共通の情報や文化をつくり出すテレビや新聞の役割は、今後も引き続き重要であることが、その意見からも理解できる。

(静岡文化芸術大学教授)